

令和六年度入学式式辞

「登っていく坂の上の青い天に、もし一朵の白い雲が輝いているとすれば、そのみを見つめて、坂を登ってゆくであろう。『坂の上の雲』の冒頭部分の一節ですが、私には、この小松高校のふもとから「篤志の坂」と呼ばれる坂を登り、この養正が丘に集う生徒の姿が思い起こされます。

桜が満開の養正が丘に立つと、温かく霞む道前平野や雪どけの霊峰石鎚、穏やかに波打つひうち灘など、巡る季節の中で景色の変化を感じます。自然も社会も人事もすべてのものが新しい環境の下で動き始めている今日の佳き日に、愛媛県議会議員 塩出崇様、PTA会長 吉實勇治様、西条市副市長 越智三義様、同窓会長工藤憲治様はじめ、多数の御臨席を賜り、令和6年度愛媛県立小松高等学校入学式を執り行うことができますことは、大きな喜びであり、心より感謝を申し述べます。

先ほど、入学を許可いたしました149名の皆さん、御入学おめでとうございます。

本校は、今年で創立117年目を迎える伝統校です。江戸時代に小松藩の陣屋町として発展したこの地域は、歴史と文化の風薫る街です。一万石という小さな規模であるからこそ、人と人が触れ合い、協力しながら慎重に周囲の状況を把握し、出来事を記録しながら生活をしてきたおかげで、230年もの間平和を維持し、飢饉もなく餓死者を出さなかった奇跡の藩と言われています。皆さんも風光明媚なこの場所で、触れ合い、支え合いながら豊かな高校生活を送ってくれるものと信じています。

今から新しい高校生活が始まる皆さんに大切にしてほしいことを三つ述べます。

まず、挨拶を大切にしてほしい。コロナ禍では、思うように会話ができず挨拶さえままならぬ状態でした。人との出会いも、一日のスタートも挨拶から始まります。気持ちの良い挨拶は、お互いの雰囲気をよくします。つい、先日亡くなられた元アナウンサーの鈴木健二氏はその著書『気くばりのすすめ』の中で、挨拶の挨は「開く」、「拶」は「迫る」すなわち、挨拶は「心を開き、相手に迫る」ことを意味していると挨拶の大切さを説いています。ここに集った皆さんのめぐりあいは偶然で不思議なもの、そのめぐりあいが将来の自分の道標を定めてくれるものになるかもしれません。その第一歩は挨拶から始まります。

二つ目は、三年間を通して自分自身の成長を感じてほしいということです。本校の校門に掲げられた、「積微力行」という言葉は、「小さなことの積み重ねが大切であり、労を惜しまず励み努めなさい。」という意味です。今、それぞれが抱えている気持ちが芽生え、やがて

大きな夢や希望へと膨らんでいきます。高校時代は、学習活動や部活動を通して自分自身を見つめ、自分は何がしたいのか、何ができるのか、どのような人生を歩みたいのかじっくりと考えることができる時期です。小さな努力を積み重ね、振り返ると大きな成長を遂げていると感じられる三年間にしてください。

三つ目は、自分自身の可能性を信じてほしいということです。昨年4月に87歳で亡くなられた動物研究科のムツゴロウさんこと畑正憲さんは、その常識にとらわれない行動力で、北海道にムツゴロウ王国という動物王国を築き上げるわけですが、次のような言葉を残しています。「才能とは不思議なものであり、それだけでは存在し得ず、人間というもっとも厄介な袋に詰められている。」あなたの才能はあなたが持っているがゆえに意味あるものとなるのです。あなただから引き出せる力を持っているのです。あなたのことを他人はまねできません。あなたの可能性はあなたに委ねられているのです。

これからはじまる小松高校での三年間、共に学び、共に語らい、涙し、笑い、二度と来ない青春の日々を謳歌してください。その中で、日々の積み重ねを大切に、志を果たすために必要な力を、しっかりと蓄えていくことができるよう私ども教職員は、精一杯力を注いで参ります。

最後になりましたが、保護者の皆様、本日はおめでとうございます。

お子様が大いに活躍し、本校の伝統を継承しながらも未来に向けて新しい小松高校の礎を築いていくことを祈念して、式辞といたします。

令和六年四月八日

愛媛県立小松高等学校

校長 村井 浩昭